

昭和6(1931)年『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』について

Study on “Zyoetusen-zentukinen-hakurankai-tyoukanzu” printed at 1931

平山 育男
HIRAYAMA Ikuo

キーワード：鳥瞰図、長岡市、博覧会

Keywords : birds-eye view, Nagaoka city, exhibition

1 はじめに

前稿¹においては、昭和6(1931)年に長岡市の主催で行われた上越線全通記念博覧会に併せ、上越線全通記念博覧会と同協賛会が発行した鳥瞰図『長岡大観』²について紹介、分析を試みた。前稿の考察からは博覧会に際して鳥瞰図『長岡大観』とは別に、“日本画風の鳥瞰図”の造られたことも示した。この“日本画風の鳥瞰図”については、上越線全通記念博覧会の全貌を示す『長岡市主催上越線全通記念博覧会誌』（本文では以下、「会誌」と略称する）³において次のような記載を見ることができる。

原図で再三改版し一尺五寸の二尺の一枚絵五色刷り日本画風の鳥瞰図を作り裏面には藍で趣意書、会の概況、観覧の葉、本会の誇りの六項目を印刷して来賓や出品人に配布した⁴

前稿で示したように、これは寸法から見ても鳥瞰図『長岡大観』とは異なるものであり、前稿執筆時において筆者未見の資料であった。そのため筆者は前稿執筆以後、資料の収集に努め、3点の“日本画風の鳥瞰図”を入手することができた。各資料はいずれも『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』とするものである。以下では同図を『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』（なお、本文では単に『鳥瞰図』とも略称する）として、この鳥瞰図がどのような性格のものであったのかなどについて、資料類に即して考察を進めるものである。

2 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』について

『鳥瞰図』は、上述した会誌にもあるように、再三改版が行われたようで、手許の3点は微小ながら各々差異を有するものである。そのため、『鳥瞰図』3点を資料①、資料②、資料③とする。実物の大きさは後掲する表1に示した通りであるが、これを誌面の都合上、A3サイズに納まる74%程度の縮小として文末に掲載した。なお体裁、内容などは共通する点が比較的多いため、以下にその概要を示すが、記載内容等から見て、資料①→資料②→資料③の順で作成が行われたと仮定して論証を進め、最終的にはその是非を判断したい。

・概要

『鳥瞰図』3点は、いずれも鳥瞰図の描かれる側を表面として、上下2つに谷折り、更に裏面向かって右上が表紙となるよう、裏面から見て向かって左側を2度山折りとする8ツ折りとするもので、両面に印刷がなされている。なお、鳥瞰図は向っ

て左から「A」「B」「C」「D」、上下に2等分して上から「1」「2」と区画し、文字情報の位置を記す手立てとした。このため、以下では具体的な施設名などの位置をこの記号を用いて□囲みにより、適宜示すこととする。また、同様に裏面は向って左から「a」「b」「c」「d」、上下に2等分して上から「1」「2」と区画して、以下の記載に用いる。

・大きさと体裁

『鳥瞰図』の大きさは表1に示した通りで、3資料間にやや差異が見られるものの、平均すると横548mm、縦395mmとなり、表側の鳥瞰図を5色のカラー刷り、背面の文書を資料①が黒色インク、資料②③が藍色のインクで印刷するものである。折込みの方法は前述のように、いずれも表側を折り込む形で8ツ折りとする。なお、資料②③のみ、表面向かって左下欄外に「新潟 青木印行」と青色で刷り込まれる。

・内容

表面は全体を2mm幅の黒線で囲み、向かって右上[D1]に「会期 昭和六年自八月廿一日至九月廿日／上越線全通記念博覧会鳥瞰図・主催 長岡市」（／は改行、以下同様。）と縦書きで記される。鳥瞰図は会場を南東上空から見下ろしたものとなっている。[A2]に正門⁵があり、この正面にあたる[B1]を中心として噴水塔及び大池⁶が置かれる。そしてこの大池の周囲に各展示館が配される構成となっている。正門から時計回りに主要な展示館などを挙げれば、[A2]長岡出品館、[A1]鉄道記念館、[A1]野外ステージ、[A1]放送局特設館、[B1]司令塔、[B1]迎賓館、[A1]展望台、[B1]エレベーター、[A1]機械館、[A1]ダイヤモンドライト、[B1]北海道館、[B1]朝鮮館、[B1]展望台（2箇所）、[B1]国防館、[B1]海軍塔、[B1]満蒙館、[C1]各府県出品館、[D1]新潟県出品館、[D2]子供ノ国、[D2]演芸館、[D2]長岡酒造、[D2]キリンビール、[C2]魔法の国、[C2]健康館、[C2]健康別館、[C2]事務局、[C2]蚕糸館、[C2]漫画館、[C2]通信館、[C2]農林館、[C2]奈良特設館、[C2]三ツ葉食堂、[C2]森永製菓、[C2]岐阜特設館、[C2]京都特設館、[B2]台湾館、[B2]樺太館、[B2]名古屋出品館、[B2]福井物産館、[B2]宝翰堂文具店などとなる。なお、鳥瞰図への建物名などの書込みは、資料③において表2に記した69件となる。

裏面は、上段向かって右から左へ縦書きで文章が上下2段に記され、大きく分けると表紙、趣意、概況、観覧の葉、本会の誇りとなる。

裏面では先ず[d1]に「会期 昭和六年《自八月二十一日／至九月三十日》／上越線全通記念博覧会鳥瞰図／主催 長岡市」（《》は割注形式。以下同様）⁷とあり、主催の上に当時の市章が描かれる⁸。[c1]から[b1]にかけては「《長岡市／主催》 上越線全通記念博覧会開催の趣意」として昭和5(1930)年7月2日発表とされた「上越線全通記念博覧会長／長岡市長 木村清三郎」による18行の文章が記され、役員として名誉総裁 子爵 牧野忠篤以下、総裁 新潟県知事 黒崎真也、副総裁 新潟県内務部長 福邑正樹、名誉顧問 貴族員議員 橋本圭三郎、顧問 長岡商工会議所会頭 鷲尾徳之助、会長 長岡市長 木村清三郎、副会長 長岡市会議長 田村寅吉、副会長兼総務 長岡市助役 関威雄の名前が掲げられる。続いて[b1]から[a1]更に下段の[d2]にかけて「概況」として、「昭和六年《八月二十一日ヨリ／九月三十日マデ》とする会期、「第一会場 長岡市中島町」、

表1 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』用紙の大きさ

資料名	縦[mm]	横[mm]
資料①	398	550
資料②	394	547
資料③	394	546
平均	395	548

「第二会場 寺泊港（水族館）」、「経費 五十二万六千円」、「敷地 二万三千坪」、「出品 二千七百十八小間」とし、「出品小間数」の表が挙げられ、各府県館以下の規模が棚 1,176.5 小間、台 1,570 小間、土間 677.25 小間、計 2,718.5 小間で示される。なお、備考欄に「一小間トハ六尺ノ三尺」とあるものの、横軸、縦軸の合計はいずれも合致しない。続いて「主建築 五千八百七十坪」として出品本館以下 28 項目にわたり各館の面積が記される、最後に「計 五,八七七,一」とするがこれも合計値とは合致しない。以下、参加区域、教育博覧会、余興、長岡名物、会場、交通、の項目とする。続いて[d2]から[b2]には「観覧の栞」があり、「入場料」、「観覧期間」、「主なる観物（動くもの）」の項目がある。入場料は本会の昼は大人 25 銭、小人 10 銭、夜大人 15 銭、小人 5 銭、エレベーター大人 15 銭、小人 10 銭、コドモノクニ大人 5 銭、小人 5 銭、魔法ノ国大人 10 銭、小人 10 銭などで、「本会団体」として「普通団体」、「学生団体」、「軍人」の種別を挙げる。観覧期間は「八月二十一日午後一時ヨリ九月三十日迄 昼午前八時ヨリ午後五時 夜午後六時ヨリ十時迄」、「夜間開場ハ八月二十一日ヨリ九月月上旬迄ノ見込ニシテ出品館ハ開扉セザルモノトス」とされる。また、「観覧ニ要スル時間 一トマワリ 三時間 ユツクリ 六時間」とある。主なる観物（動くもの）には野外ステージ、鉄道実演、放送局特設館、噴水台、納涼池、大噴水、エレベーター、電光ニュース、展望台、ダイヤモンドライト、軽気球、楽天則、コドモノクニ、演芸館、魔法の国、活動写真の各項目を 15 行に渡って記載する。最後に[b2]から[a1]にかけて「本会の誇り」として題名等は付されないが、内容から仮に「建築」、「平面計画」、「涼味」、「収入」、「参加県数」、「協賛会」の 6 項目が挙げられる。

・文字表記の方法

『鳥瞰図』においては上述したように、建物などに名称が付されるが、いずれの資料においても総て建物名などに文字情報は黒枠を施して内部に筆書きとする。また、[D1]に記される図の表題も資料①②が黒枠に黒文字、資料③が赤地に 1、3 行目が白抜き文字、2 行目を黒文字とするがいずれも筆書きとする。

3 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』の記載内容の検討

・実際の建物と『鳥瞰図』に見る建物

博覧会場では第 1 会場となった長岡市分だけでも 108 件の建物・施設が設置された⁹。『鳥瞰図』ではこのうち 80 件程度の施設が描かれているが、3 資料間では幾つかの項目において建物の描写が異なっている。そこで、以下では、正門と 3 資料で建物名の記された 69 件について描写内容の異動と実際の比較検討を行って行きたい。なお、以下にあげる項目の番号は表 2 に対応するものとする。

1) 正門

会場入口には全体が凸型の立面で丸窓を持つ正門が建ち、中央の一段高い門部分は市松格子組の模様が入り、中央に向かって右側から「上越線全通記念博覧会場」の 11 文字¹⁰が記されるものであった。

資料ではいずれも凸型の立面で格子組が描かれ、丸窓も有するが、資料①②では正面に「上越全通記念博」の 7 文字があるのに対し、資料③では判読不明の 6 文字が掲げられるに留まる。

資料③は資料①②に比較してやや正確さに欠けることとなる。

2) 自動車詰所 3) 第二会場切符売場

自動車詰所は人力車、仕立事務所を兼ね 1.42 坪の広さであった¹¹。第二会場切符売場は 2.1 坪の規模で、寺泊実業協会により設けられた¹²。

資料①②で描かれず、資料③では平家の建物が描かれる。

4) 明治製菓塔

正式には「明治製菓広告塔」と称され、長岡市神山商店によるもので 3 坪の広さがあったとされる¹³。

資料①②では塔屋先端は階段状に 3 段ですぼまり、頂部に赤旗を翻し、側面に文字は記されない。資料③では同様の形態で側面に判読はできないが文字のようなものが記されるように描かれる。

5) 指定運送店

これも実際の仕様は明らかではない。

資料①②で描かれず、資料③では平家で切妻造の建物が描かれる。

6) 携帯品預所

資料①②③では、正門前西脇の建物は「携帯品預所」とされるが、実際は警察官詰所等として用いられたようである。建物は正門に連続した矩折平面で、正面側に独立柱が 4 本立ち、正門際には窓が設けられた¹⁴。

資料①②では正門と独立して矩折平面の建物があり、正面側に独立柱 5 本が描かれ窓口が描かれる。資料③では同様の建物で窓口がなく、名称が記される。

7) 郵便出張所 8) 鉄道案内所

正門を入った向って左側には郵便出張所と鉄道案内所が 1 棟で設置され、外壁は卵色仕上であった¹⁵。

資料①②で建物のみ描かれ、郵便出張所側に干のマークが見られる。資料③ではほぼ同様の建物が描かれるが、干がなく、建物名の記載がある。

9) 北越新報塔

長岡出品館は背面に北越新報塔が配されたが、詳細は明らかではない。自営建築物として扱われたようである¹⁶。

資料①②では屋根が錐型となる建物が描かれるが、資料③では周囲に六角柱型の骨組みを有する建物が描かれる。

10) 都染塔

長岡出品館の東に配され、1 坪の規模であった¹⁷。

資料①②では台座が四角柱で赤い模様が入り、上部に赤い模様の入る八面体が置かれる塔が描かれ、資料③では同様の塔と名称が記される。

11) 長岡出品館

長岡出品館は正門の西際に設けられた。建物全体が「く」の字型平面で、外壁は卵色とした。中央の入口は山形の 3 口で立面は凸形、中央の塔屋は壁面に 3 筋、上部が山形に尖った細長いガラス窓を設け、塔屋先端は階段状にすぼまり、入口、塔屋縁はブロンズ色の立体模様とするものであった¹⁸。

資料①②で建物は「く」の字平面で外壁は卵色、中央の塔屋は背面に 3 筋、側面に 2 筋、上部が半円の細長いガラス窓を設け、塔屋先端は階段状にすぼまり、正門側入口上塔屋縁は手摺とする。資料③では「く」の字平面で外壁は卵色、中央の塔屋は各面とも 3 筋、上部が半円の細長いガラス窓を設け、塔屋先端は階段状にすぼまり、正門側入口上塔屋縁はブロンズ色の立体模様とする。

比較すると資料③が資料①②により、実際の形には近いものと言える。

12) 鉄道記念館

鉄道記念館は長岡出品館の西隣に建ち、切妻造で平入、壁面は白色の構成派風建築とされた¹⁹。鉄塔が正面東側に建ち、「鉄道特設館」の看板が掲げられた。また、記念館から鉄路が伸びて野外ステージ脇に鉄道実演館が設けられた。

資料①②では、長岡出品館裏に切妻造平入、壁面白色の建物と掲揚塔が名称とともに記される。しかし、鉄塔、鉄路及び鉄道実演館は描かれない。資料③では、建物の概要は資料①②と

同様に掲揚塔、鉄塔は描かれないものの、線路と鉄道実演館を見ることができる。

このように資料①②に比べ資料③では線路と鉄道実演館が描かれ、描写の精度が上がっている。

13) 農機実演館 14) 機械館

機械館は配水塔下に配されコの字型の平面で、屋根は切妻造で配水塔部分が片流れとなっていた。東側の農機実演館側入口は山形で、正面側に設けられた塔屋は頂線が緩い円弧で、正面両脇に格子状のガラス窓を配していた²⁰。

資料①②③はいずれも矩形の平面で、東西2カ所の入口があり、「農機実演館」、「機械館」の名称を記す。

15) 野外ステージ

野外ステージは鉄道記念館北側に設けられ、正面に長方形で卵色の壁面を向け、ステージの上を円弧に開いていた²¹。

資料①②③ではいずれも、実際に準じた建物が描かれている。

16) 放送局特設館

野外ステージの北側に長方形平面、外壁を白色、北側面に「JOAK」の文字を記し、中央に旗を掲げるラジオ館²²が建てられた。

資料①②③とも野外ステージの北側に上記の建物を見ることができるが、「JOAK」は背面となるため見ることはできない。

17) サンエス万年インク

長岡出品館正面に4坪の広さで「サンエスペンインキ特設館」が設けられた²³。細沼株式会社によるものであったため「細沼インキ特設館」の名称も伝わる。頭に大きなインク瓶をあしらった開放された建物内には見本を並べ、ベンチも配された²⁴。

資料①②③とも立方体形の建物に上にインク瓶形のもの为载体、開放の室内にはベンチが置かれる。

18) 展望台 19) エレベーター

配水塔にタンク側面には「わかもと」の看板が掲げられた。また、塔の東側に鉄骨造のエレベーターが建てられ、配水塔との間に観覧台が設けられた²⁵。

資料①②では配水塔とエレベーターは描かれる。資料③に至り、配水塔台座に垂れ幕、タンク側面に「わかもと」の文字を見ることができる。また資料ではいずれも、塔頂部に四角、エレベーター頂部に三角の赤旗がなびくが、実際には付けられなかったようである。

このように資料③が実際の様子には最も近いものであった。

20) ダイヤモンドライト

既存する水道局の監視室とポンプ室を用い、監視室では水道参考品の陳列、ポンプ室では施設開放を実施し²⁶、ポンプ室上には東京朝日新聞提供で、ダイヤモンドライトが設置された。これは径10数尺で椀型、外面は鏡の切子状となり、回転してとりどりの色の光線を放つものであった²⁷。

資料①②ではポンプ室上に棒が立ち、その頂部に綿状のものが描かれる。資料③ではポンプ室上に台に椀型のライトを載せ、頂きに赤旗を翻す。

全体としては資料③の描写が実物に近い。

21) 噴水塔

敷地中央に五角形の池が設けられ納涼池とも称され²⁸、池中央には高さ10m余の生命保険協会噴水塔を配した。塔は六角柱の7段で、各方向に十数条の噴水を上空20m余の高さまで吹き上げた²⁹。

資料①②③とも上述のような池と六角柱7段の噴水塔を描く。

22) 指令塔

池畔に指令塔を設け、池中にケーブルを配して模型軍艦などの操縦実演を行う予定であったが、実行には至らなかったという³⁰。なお、ここでは会期中、ビクター蓄音機会社により蓄音

機の演奏が行われたと言う³¹。

資料①では池の西角に「指令塔」を設け、池上に軍艦など5隻、池中に魚雷1発を描く。資料②ではこれに白鳥と思しき鳥3羽が白く描かれ、資料③では更に白鳥に外形線が入られる。

23) 迎賓館

池の北西岸際に寄棟造瓦棒葺鉄板葺で周囲に下屋を配した迎賓館が設けられた。屋根は茶褐色、外壁は卵色で、周囲に東洋風のペランダ、テラスを設けた³²。なお、2階は喫茶室となっていた³³。

資料①②では方形造で、池中へ直接降りることのできる階段を有し、屋根が緑色の建物が描かれる。資料③では屋根が入母屋造で茶褐色、一部周囲に下屋を持ち、池側は手摺に留まる建物が描かれる。

資料を比較すると、屋根、手摺等いずれも資料③が最も実際の形に近い。

24) 展望台(東) 25) 展望台(西)

2カ所の浄水池上が展望台とされ、これらを後述する平石製綿商店による九阜橋でつないだ³⁴。

資料①②③ではいずれも浄水池2カ所とこれをつなぐ橋が描かれる。但し、資料①②では浄水池への入口が背面にも描かれるが、資料③ではこれがない。資料①②の姿が実際のものに近い。

26) 平石製綿塔

浄水池間に橋を架け、牧野名誉総裁により九阜橋と命名された³⁵。橋は中央が塔状となり、長岡市の平石製綿の提供であったため³⁶このようにも呼称された。

資料①②では橋欄干の両側が描かれ、資料③では片側のみが描かれる。

欄干は橋の両側に設けられ、全体としては資料①②の方が実際の形には近い。但し、資料①②では中央柱に相対する柱もやや高いものとするが、写真にそれを見ることはできない³⁷。

27) 小千谷噴水塔

北海道館の脇に長岡鉄工所のポンプを設置して水道水を集水し、既存の水道局周囲に設けられた堤に臨み、小千谷実業協会が設けた三角形で高さ10尺余の噴水塔にこれを吹き上げ、径10尺余の受け台から数尺の落差で貯水池に落ち、ここから大池へ給水した³⁸。

資料①②③とも、既存の水道局周壁内側に噴水塔が設けられ、壁の外側には長方形の池が描かれる。

28) 時事新報

池の北西側に「時事新報休憩所」が設けられ、ここには椅子と毎日の新聞が準備され、休憩に用いられた³⁹。

資料①②③とも、池の北西側に茶色の屋根の建物が描かれる。

29) 北海道館

ポンプ室の北東には白亜の壁に囲まれた北海道館があり、正面には長方形の塔が設けられ、頂きには庁旗が翻る⁴⁰。

いずれの資料とも白壁で、中央に塔を設ける建物を描くが、資料③のみ旗が見られない。

30) 朝鮮館

北海道館の北東側には朝鮮館が置かれた。朝鮮館は基壇上に建ち、柱は朱塗りで、緑色で反りの強い入母屋造の屋根が特徴的で棟部分を黄色とする朝鮮宮殿を模した形式で⁴¹、本館の北東側に売店が設けられた。

資料①②③とも基壇上に朱塗りの建物で、屋根は緑色で反りの強い入母屋造の建物とし、本館北東側に小規模の建物を描く。

31) 国防館

朝鮮館東側に国防館が設けられた。国防館は西側が陸軍、東側が海軍となる矩形平面の外角部に玄関を設けた。陸軍側が外壁は黄色で上縁は城郭を模し凹凸となり、建物妻面に星形の陸

軍のマークを付した。海軍側は外壁が水色、上縁が反り返り、壁面に丸窓を連続的に開き、妻面に碇を付した。中央入口は両側に円柱の塔を配し、中央壁面に日本を赤色とした国防世界地図を掲げた。

資料①②③とも上述されるような施設を描いている。

32) 海軍塔

海軍側の建物前に「海軍マスト」(海軍塔)と呼ばれ、艦艇の帆柱を模した塔が建てられた。高さは90尺程で会場内では配水塔を除き最も高いものであったという⁴²。

資料①②では鉄塔で頂きに旭日旗を掲げる。資料③の塔はマスト型で旭日旗を掲げ、こちらが実際のものに近い。

33) 満蒙館

各府県出品館の西側に接続し、国防館の裏側に位置する。ゴシックを基調とした入口で⁴³、関東庁と満州鉄道の合同出品による⁴⁴。

資料①②③ではいずれも階段型の塔で、屋根上に水色の旗を掲げる。

34) 電光ニュース

各府県出品館(西)屋根上には、東測電気株式会社により、長さ数10尺、高さ2尺余の電光ニュースが設置された⁴⁵。

資料①②には描かれず、資料③にのみ、各府県出品館(西)屋根上にこれが描かれる。

35) カルピス

各府県出品館(西)入口の南側に配されたもので、正式には「カルピス桃太郎行列広告板」と呼称され、6坪の広さとされる⁴⁶。桃太郎の一行がカルピスを負って立つ⁴⁷ものである。

資料①②には描かれない。資料③では一行が荷車上に瓶を載せ引く姿を確認でき、これが実際のものに近いようだ。

36) 各府県出品館(西) 37) 各府県出品館(東)

出品本館は国防館から西側に伸びる建物で切妻造の長大な建物で、外壁は白漆喰仕上げで、腰回りは鼠色、屋根は鉄板葺で緑色の形状とした。敷地内側に東から4カ所の入口があり西塔屋、中央玄関、東塔屋1、東塔屋2の塔屋が設けられていた。なお、西塔屋が満蒙館の入口となる。中央玄関が最も大きく、入口は3口の尖塔型アーチで、矩形の塔四隅に矩形の塔が更に取り付く近代ゴシック風であった。西塔屋と東塔屋1が類似の形式で、尖塔型の入口が西塔屋は1口、東塔屋1が2口で、いずれも3段で先すばまりとなる矩形の塔屋で屋根は方形造で西はゴシック、東は東洋風にしたという。東塔屋2は1カ所の尖塔型アーチの入口が開き、三角屋根の塔屋とする⁴⁸。

資料①②③ともほぼ同様の形式で建物と入口を設ける。但し、新潟県出品館へ続く隅部付近の建具を資料①②では4口、資料③では3口とする。

38) 丸善

「丸善塔」⁴⁹、「丸善インキ広告塔」とも称され、4坪の広さを有した⁵⁰。

資料①②では四角錐形で上部を赤、資料③では四角錐形で上部を黄色と赤とする塔が描かれる。

39) 静岡製茶組合

各県出品館前に静岡県茶業組合聯合会議所による無料休憩所が設けられた⁵¹。「静岡茶接待所」ともされ、18坪の広さで⁵²、杉皮屋根の形式であった⁵³。

資料①②では各県出品館前に切妻造の建物が描かれるが、資料③では建物は描かれず、文字の書込みのみがある。資料①②が実際のものに近い⁵⁴。

40) 森永ミルク

各県出品館入口南側に大きなミルク缶を頭にのせて立つもので⁵⁵、正式には「森永ミルク広告塔」と称され、2坪の広さで

あった⁵⁶。

資料①②では描かれず、資料③では頂部が錐型となる黄色の塔が建物名とともに描かれる。

41) ライオンハミガキ

後述する京都館の前方に、ライオンハミガキ特設館が設けられた。形態は、歯磨きのチューブを象ったもので、壁面に「ライオン歯磨」と記される。正式名称は「ライオンハミガキ特設館」とされ、10.5坪の規模で⁵⁷休憩設備を備えた⁵⁸。

資料①②③とも長方形平面の片側に寄ってチューブ形の歯磨き粉が建物名とともに描かれる。

42) 新潟県出品館

新潟県出品館は出品の東側に続いた。中央に20m程で縦の線を強調させた塔を配して両脇に入口を設けた。建設の概要は出品本館等と類似する⁵⁹。

資料①②③とも出品本館から折れて配され、子供の国側に入口を設ける。

43) 水無鉛塔

子供ノ国前に立てられたもので、正式に「今村水ナシアメ広告塔」と呼称され、1坪の広さであった⁶⁰。

資料①②には描かれず、資料③では黄色い塔が名称とともに描かれている。

44) メートル塔

子供ノ国前に水無鉛塔と並んで配された。新潟県度量衡検定所長岡支所により建設がなされ1坪の広さであった⁶¹。

資料①②③とも三角で水色の塔が名称とともに描かれる。

45) 子供ノ国

演芸館前に柵を廻し、子供の国が設けられた。内部には飛行機型のメリーゴーランドと富士山登り⁶²、遊動円木⁶³などが設けられた。

資料①②③ともに、演芸館前を柵で区切り、三角で水色の塔が名称とともに描かれる。

46) 演芸館

敷地西隅に演芸館が配された。屋根は腰折式で切妻平入、桁行中央に切妻形式の入口開けられ、壁面は卵色、屋根は緑色で、全体はスパニッシュスタイルとして、入口両側に売店が設けられた⁶⁴。

資料①②では腰折式で桁行中央に入口を設ける建物が描かれ、資料③も同様ではあるが、軒が張り出さない。実際には資料①②の形式に近い。

47) キリンビール

「キリンビール食堂」とも呼称され、28.5坪の広さを有し⁶⁵、正面に大きな瓶を象ったものが配された⁶⁶。

資料①②③ともに演芸館脇にビール瓶と半円形の建物が描かれる。なお、資料①②では建物屋根が赤、資料③では灰色となる。

48) 長岡酒造

キリンビールの奥には長岡酒造組合により25坪の広さを有する「酒の家」が設けられた⁶⁷。屋上に菰被りの大樽を載せていた⁶⁸。

資料①②③ともにキリンビールの奥に切妻妻入の建物が建物名とともに描かれるが、いずれも大樽の描写はない。

49) 魔法の国

健康館正門脇にマジックアイランドが設けられた。建物は木造平家建て、切妻妻入の西側妻面に半円形で顔型を模した大看板が取り付け、入口は半円状に出っ張る、エジプト趣味を強く表現した構成であった⁶⁹。

資料①②③とも切妻妻入の妻正面に半円形の看板を立てた建物として描かれる。

50) 高陽館食堂

長岡酒造隣に高陽館食堂が設けられた。35坪と食堂では最も規模が大きいものであった。

資料①②③とも切妻妻入の建物が描かれ、資料③のみ建物名が入られる。

51) 奈良特設館

マジックアイランドの北側に奈良館と大仏、鐘楼を配する奈良館が設けられた⁷⁰。

資料①②③とも切妻妻入の建物前に大仏の頭などを見ることが出来る。

52) 健康館 53) 健康別館 54) 事務局 55) 繭糸館

56) 漫画館 57) 農林館 58) 通信館

上に挙げた事務局、健康館、繭糸館、農林館は長岡商業学校の校舎を用い、事務局、健康館、繭糸館は教室、農林館と倉庫は雨天体操場及び柔道場をあて、健康別館のみ新築とする⁷¹。校舎は4列ある建物を直行する2筋の廊下が繋ぐ。

資料①②③とも4列の校舎を2筋の廊下がつなぐ構成を描く。

59) 三ツ葉食堂

奈良特設館の北西に三ツ葉食堂が設けられた。広さは26.3坪であった⁷²。

資料①②③とも切妻妻入で、正面に塔を配する建物が描かれる。

60) 森永製菓

三ツ葉食堂の隣には森永製品越後販売株式会社により、24坪の広さで食堂の経営と菓子即売があり⁷³、建物はバラベットの子ども顔や菓子をあしらったものであった⁷⁴。

資料①②③とも四角形平面の建物上に階段状のすほまりがあり、頂きに赤旗3本を翻す。

61) 岐阜特設館

森永製菓の南西に岐阜館が配され、特産物等の即売が行われた⁷⁵。

資料①②③とも四角形平面で切妻妻入建物周囲に看板を立ち上げ、正面に鍵形の塔を立てる形式で描かれる。

62) 京都特設館／国産連合売店

農林館の北側に京都館が配された。宮殿造で入母屋造の建物で、入口脇に休憩所が設けられた。なお、ここでは京都の物産を中心に物産の即売、八ツ橋の実演即売等も行われた⁷⁶。

資料①②③ともと長方形平面で、入母屋造の建物が描かれ、更に資料③のみ、岐阜特設館側に小規模な入母屋造の建物が書き加えられる。

63) 台湾館

農林館の北西の台湾館は2階建てで軸部全体が赤茶色、1階が大壁、2階正面側が柱間開放の構造で、屋根は入母屋造で緑色、棟は黄色であった⁷⁷。

資料①②③ともと長方形の平面で、総2階建入母屋造、壁面は黄色、屋根は緑色とする。なお、資料③のみ位置が南西にややずれる。

64) 樺太館

樺太館は台湾館の西側に配される。2階建てで1階は朱色を基調に三角の装飾があり、2階は白、中央に矩形の塔があり頂部に旗を翻す。なお、中央入口は三角の庇で角部に皮付き白樺の円柱を立てる⁷⁸。

資料①②③とも長方形の平面で、総2階建切妻妻入、壁面は白を基調とし、1階部分には青を基調とした三角の模様が入り、屋根は緑色とする。

65) 名古屋出品館

樺太館の北側には名古屋城を模し、名古屋実業協会による名古屋館が建てられた⁷⁹。

資料①②③とも五重の天守閣風の建物と切妻平入の建物が描かれる。

66) 報知新聞塔

名古屋館の西に位置して正式には「報知宣伝塔」と称され、長岡鉄工組合による火見櫓を装飾した⁸⁰。時計台風の塔で、頂きに旗が掲げられた⁸¹。

資料①②では鉄骨塔が描かれるのみで、資料③では時計台風で頂きに旗を翻す塔が建物名とともに描かれる。

67) 福井物産館

名古屋出品館の南に位置し、正式には「国産発明館」と称され、福井市人絹織機の実演等が行われた。なお、会期中風害に遭い、途中から塔を低くしたとする⁸²。

資料①②③とも切妻妻入の建物前に、高い塔形の看板が立つ。但し、資料①②では旗が3本舞うのに対し、資料③では中央の1本のみのである。

68) 宝翰堂文具館

正門の東側に宝翰堂文具館が置かれた。宝翰堂文具館は北西隅が円弧の壁と塔があり、背面に「ライトインキ」「パイロット高級万年筆」と記された広告塔が建つ⁸³。

資料①②③とも正面に塔を持つ建物が描かれる。

69) 救護所

正門東側の部屋が救護室とされ、長岡市医師会から担当医が派遣された⁸⁴。

資料①②③とも正門東側に建物が記され、資料①②では名称の記載がない。なお、資料③では正門東側に別棟が描かれ、これに「救護所」の記載があるように見える。

・資料間の比較検討

以上見てきたように、鳥瞰図描かれる建物類は資料間、差異を見ることが出来る。それを一覧にまとめたものが表2となる。

これによれば、鳥瞰図に限ればその内容は資料①と資料②においては同一であると言える。これに対して資料③は建物名の記載自体が9項目増加している。また上述したように、11) 長岡出品館、12) 鉄道記念館、18) 展望台、20) ダイヤモンドライト、23) 迎賓館、32) 海軍塔、34) 電光ニュース、35) カルピス、43) 水無鉛塔、66) 報知新聞塔などの項目は、資料③が資料①②に比べ実際の建物により近い表現となっている。

以上のことから、資料①②が先行してあり、これを改変することで資料③がなったと見るのが妥当であろう。

但し、資料①②の方が資料③より正確な建物が幾つか存在した。26) 平石製綿塔、39) 静岡製茶組合、46) 演芸館、69) 救護所がそれである。各々の事情あるものと想定され、多くは改版時における情報不足と想定される⁸⁵。

4 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』裏面「表紙」、「趣意」、「概況」、「観覧の葉」、「本会の誇り」の内容検討

鳥瞰図の裏面には表紙、趣意などが記されているものの、これらも表面の鳥瞰図同様に資料間では若干の差異が確認された。以下では、各項目における相違を示し、その原因や背景などについて考察を加えたい。

・「表紙」、「趣意」、「概況」、「観覧の葉」、「本会の誇り」の比較

1) 「表紙」

表紙では、資料①②③とも記述内容は同一であるが、資料①では、当時の市彰が背景に8カ所、文字にかからないように配置される。

2) 「趣意」 3) 「概況」

資料①②③とも同内容である。

4) 「観覧の葉」

「入場料（個人）」、「本会団体」、「観覧期間」は同内容であるが、「主なる観物（動くもの）」に差異が見られる。

先ず、資料間で項目数に相違がある。資料①は16項目である

表2 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』に見られる建物

番号	場所	記載	資料①	資料②	資料③
1	A 2	正門	△	△	△
2	A 2	自動車詰所	×	×	○
3	A 2	第二会場切符売場	×	×	○
4	A 2	明治製菓塔	△	△	○
5	A 2	指定運送店	×	×	○
6	A 2	携帯品預所	×	×	○
7	A 2	郵便局出張所	△	△	○
8	A 2	鉄道案内所	△	△	○
9	A 2	北越新報塔	△	△	○
10	A 2	都染塔	△	△	○
11	A 2	長岡出品館	○	○	○
12	A 1	鉄道記念館	○	○	○
13	A 1	農機実演館	○	○	○
14	A 1	機械館	○	○	○
15	A 1	野外ステージ	○	○	○
16	A 1	放送局特設館	○	○	○
17	B 2	サンエス万年インク	○	○	○
18	A 1	展望台	○	○	○
19	A 1	エレベーター	○	○	○
20	A 1	ダイヤモンドライト	○	○	○
21	B 1	噴水塔	○	○	○
22	B 1	指令塔	○	○	○
23	B 1	迎賓館	○	○	○
24	B 1	展望台(東)	○	○	○
25	B 1	展望台(西)	○	○	○
26	B 1	平石製綿塔	△	△	○
27	B 1	小千谷噴水塔	△	△	○
28	B 1	時事新報	○	○	○
29	B 1	北海道館	○	○	○
30	B 1	朝鮮館	○	○	○
31	B 1	国防館	○	○	○
32	B 1	海軍塔	○	○	○
33	B 1	満蒙館	○	○	○
34	C 1	電光ニュース	×	×	○
35	C 1	カルビス	×	×	○
36	C 1	各府県出品館(西)	○	○	○
37	C 1	各府県出品館(東)	○	○	○
38	C 1	丸善	○	○	○
39	C 1	静岡製茶組合	○	○	○
40	C 1	森永ミルク	×	×	○
41	C 1	ライオンハミガキ	○	○	○
42	D 1	新潟県出品館	○	○	○
43	D 1	水無船塔	×	×	○
44	D 1	メートル塔	△	△	○
45	D 2	子供ノ国	○	○	○
46	D 2	演芸館	○	○	○
47	D 2	キリンビール	○	○	○
48	D 2	長岡酒造	○	○	○
49	D 2	魔法の国	○	○	○
50	D 2	高陽館食堂	△	△	○
51	C 2	奈良特設館	○	○	○
52	C 2	健康館	○	○	○
53	C 2	健康別館	○	○	○
54	C 2	事務局	○	○	○
55	C 2	繭糸館	○	○	○
56	C 2	漫画館	○	○	○
57	C 2	農林館	○	○	○
58	C 2	通信館	○	○	○
59	C 2	三ツ葉食堂	○	○	○
60	C 2	森永製菓	○	○	○
61	C 2	岐阜特設館	○	○	○
62	C 2	国産連合売店	○※	○※	○
63	B 2	台湾館	○	○	○
64	B 2	樺太館	○	○	○
65	B 2	名古屋出品館	○	○	○
66	B 2	報知新聞塔	×	×	○
67	B 2	福井物産館	○	○	○
68	B 2	宝翰堂文具館	○	○	○
69	B 2	救護所	×	×	○

凡例 ○：建物と建物名の記載のあるもの
 △：建物だけの記載があるもの
 ×：いずれの記載もないもの

注記 ※「京都特設館」とある

のに対して、資料②③は15項目に留まる。これは資料②③に「電光ニュース」の項目がないためである。ちなみに資料①において、「電光ニュース」は

水道参考館の屋上に現代化された走馬灯ともいふべき電光ニュースは明滅する

とあるが、電光ニュースは各県出品館の屋根上に配置された。「観覧の栞」の内容が改められたのは、記事の内容に事実誤認があり、項目自体が削除されたのであろうか。

また、記述内容では「大噴水」と「活動写真」の2項目において、資料間で以下に記すような違いが見られる。以下、後者で下線箇所を引く部分が前者と相違箇所である。先ず、「大噴水」は資料①においては

池の中央三十三尺の大噴水は五十尺に噴き上げ各階からとグルリ童子から各々細霧を迸らせる、幾千の電光に映ずる美観は想像に余りある

とする。一方、資料②③では

池の中央三十三尺の大噴水は五十尺に噴き上げ、各階からとグルリの童子の捧げてクル、まわる珠から各々細霧を迸らせる、幾千の電光に映ずる美観は想像に余りある

とされ、細部の表現が詳細になっている。

また、「活動写真」では、資料①が

通信館の側に十六ミリが面白い場面で皆によびかける。

とだけあるのに対し、資料②③では、

通信館の側に十六ミリが面白い場面で皆によびかける、外数ヶ所に映写される。

表3 「主なる観物(動くもの)」の記載比較

番号	項目	資料①	資料②	資料③
1	野外ステージ	A	A	A
2	鉄道実演	A	A	A
3	放送局特設館	A	A	A
4	噴水台	A	A	A
5	納涼池	A	A	A
6	大噴水	A	B	B
7	エレベーター	A	A	A
8	電光ニュース	A	記載なし	記載なし
9	展望台	A	A	A
10	ダイヤモンドライト	A	A	A
11	軽気球	A	A	A
12	楽天則	A	A	A
13	コドモノクニ	A	A	A
14	演芸館	A	A	A
15	魔法の国	A	A	A
16	活動写真	A	B	B

凡例 A：資料①に見られる記載

B：それ以外の記載

表4 近來の各博覧会の参加県などの推移

名称	元号	西暦	府県	市	植民地
東京平和	大正 11	1922	46	...	5
岡山	昭和 2	1927	42	...	5
山形	昭和 2	1927	39	...	6
名古屋	昭和 3	1928	27	17	5
京都	昭和 3	1928	45	2	6
広島	昭和 4	1929	42	...	6
東京海と空	昭和 5	1930	4
宇治山田	昭和 5	1930	32	11	6
長岡	昭和 6	1931	43	11	6

とあり、前段と同様、説明が詳しくなっていることが分かる。

5) 「本会の誇り」

この項目では●を記し、6項目についての記載がある。記載順に内容から仮に「建築」、「平面計画」、「涼味」、「収入」、「参加県数」、「協賛会」としたが、この内「参加県数」の記載において資料間では以下のような差異がある。つまり、「参加県数」においては近來の博覧会における参加県数を表にして示している。それをまとめたものが表4となるが、これによると大正11(1922)年に東京で行われた平和博覧会が46府県と参加県数が最も多く、昭和3(1928)年に行われた大札記念京都大博覧会の45府県がそれに続く。そして今回長岡で行われた博覧会における参加県数が43府県でこれらに次ぐのであるが、資料①では各博覧会への参加県数を掲げるこの表の直後に

渺たる五万八千の長岡市を以てして僅かに東京には及ばぬが京都と等しく《以下略》

とする。上述したように京都は45府県で、長岡は43府県に留まったにもかかわらず、この記載である。但し、これを受けた資料②では同じ内容となる各博覧会への参加県数を示した表の後に

渺たる五万八千の長岡市を以てして僅かに東京京都には及ばぬが《以下略》

とする。つまり、これは東京の平和博覧会が46府県、大札記念京都大博覧会45府県、長岡で行われた上越線全通記念博覧会43府県とする各博覧会と参加県数の関係を正しく描写する内容となっている。ところが、更に資料③においては、同じ参加県数を示した表の後に

渺たる五万八千の長岡市を以てして僅かに東京には及ばぬが京都と等しく《以下略》

とする。即ち資料③は資料①の記載に等しくなっているのである。この点についてはどのように考えればよいのであろうか。以下、「参加県の検討」の項目で考察を加えてみたい。

6) その他

周囲の罫線の配し方が、資料①と資料②③では異なる。資料①では周囲に罫線を施さないが、資料②③には以下の罫線を施す。まず、d1表紙部分では、上下に白抜ききの菱柄を有する太線と内側に細線を2本引く。縦は中線一本づつを上下の横細線に接続させる。その他の部分では四隅に玉、両脇に塔屋を配し、上部の玉は塔上の旗頭となる。上下は太さが疎らで、5本の線を配する。

・参加県の検討

この博覧会における参加県数は、資料①の「観覧の葉」における「参加県数」の記載によれば

目下植民地の全部と三府四十県の参加が決定し未決定のもの唯三県丈である

とする。即ちこの数字を合算した43府県が表4に示した参加県数の43と等しくなる。要するにこの記述に従えば資料①の記載は誤りで、資料②の記載が正しいこととなる。つまり、先行して資料①の記載があったとすれば、その誤謬を正して“僅かに東京京都には及ばぬ”とする資料②の記述になったとする経緯は納得ができるのである。しかし、再度この記述が資料③において“僅かに東京には及ばぬが京都と等しく”となったのは何故なのだろうか。

ところで、この上越線全通記念博覧会における最終的な参加県数は43府県で正しいのであろうか。この点を会誌において確認すると、その数は会誌の“上越線全通記念博覧会概要”には

一道三府四十一県五植民地⁹⁶

と記されている。即ち、最終的な参加県の合計は上記の数字を合算すると45道府県となり、これは表に示された大札記念京都

大博覧会に対しての参加県数45と同一になるのである。つまり、資料③においては参加県数を示した表における上越線全通記念博覧会の参加県数を訂正せず、“僅かに東京には及ばぬが京都と等しく”の言葉のみ、前の文言に戻したと考えることもできるのである。

但し、正確を期せば大札記念京都大博覧会に対しての参加数は1道3府42県5植民地とされ、道府県数では46件、全体において51件となる。同様に上越線全通記念博覧会は1道3府41県6植民地の参加であるので、道府県数では45件、全体で51件となり⁹⁷、この51件という数字において“僅かに東京には及ばぬが京都と等しく”なる。

なお、参加県数43県の記載は会誌の中でも数々見ることができ。「概況」においても

参加区域 朝鮮、台湾、樺太、北海道、関東庁、南洋庁、三府、四十県、全国商事相談所

とするが、「概況」とほぼ同内容の文章を一般に配布したとする⁹⁸。

ところで、参加数の最終的な決定はいつ頃であったのだろうか。会誌によれば、開催の前年となる昭和5(1930)年12月5～6日に全国主任者会議が長岡市で開催され、ここでは全47道府県に対する陳列面積が呈示されている⁹⁹。そして県外からの出品申込メ切は昭和6(1931)年5月31日、出品目録提出は7月10日とされた⁹⁹。一方、事務局はこれらの日程に従い、勧誘作業を行ったが、出品申込メ切2日前である5月29日の段階で未定は10県14市であり、ここに勧誘の電報を打ったという⁹¹。そして出品申込メ切後の6月3日の豊嶋専務理事着任時には未定は6県となり、続けて勧誘作業が行われ、最終的には島根県、佐賀県を残しての参加が決定したとする⁹²。最終的な決定日は明らかではないが、日誌によれば6月6日に各府県市宛館別小間数照会がなされている⁹³ので、これが実質的な決定日と見てよいだろう。

5 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』制作の日程

以上、『鳥瞰図』の制作に当たり、前後の事情を見て来たが、『鳥瞰図』はどのような日程で作られたのであろうか。以下ではこの点を明らかにしたい。

ところで上越線全通記念博覧会において、主催者が発行した鳥瞰図は少なくともは、前項で述べた『長岡大観』所収の鳥瞰図『長岡市大観図』、『鳥瞰図エハガキ』と今回扱った『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』の3種類が確認できる。そして『長岡市大観図』は昭和6(1931)年5月末頃から7月中旬にかけて作成され⁹⁴、7月15日には「鳥瞰図」17,000枚の印刷が決まり⁹⁵、最終的には8月21日の開会式において配布されている⁹⁶。また、“絵葉書”は7月31日に出来て⁹⁷、8月5日に“鳥瞰絵葉書”10,000枚が工政会へ送付された⁹⁸ことが、会誌の日録の記載からは明らかである。しかし、この日録には、上述した参加県の確定した6月6日以後の時点において今問題としている『鳥瞰図』についての記載を見ることはできない。しかし、その代わりに確認できるのが『会場平面図』の記載である。

日誌によれば『会場平面図』は7月21日に“校正”⁹⁹が行われ、最終的には8月2日に“会場平面図一万枚注文”¹⁰⁰がなされている。一方、『鳥瞰図』は来賓に配布したとあるが、8月21日の開会式においては来賓への配布物は

市内、徽章、食券、博覧会エハガキ、協賛会エハガキ、会場案内図

市外、右の外「長岡市の近郷」「長岡大観」市地図。

とされるものの、『鳥瞰図』の記載がない。ここでは、「会場案内図」が『鳥瞰図』である可能性が高い。更に、日誌には8月29日の項目に“会場平面図追加一万八千枚注文”¹⁰¹とあり、追加注文の

日付を確認することができる。但し、再度の追加は確認されず、9月16日に“博覧会概覧二万枚注文”¹⁰²とするものが『鳥瞰図』であるのか、判断はできないが、その可能性は否定できない。

即ち、『鳥瞰図』は7月21日に校正、8月2日に注文があり、8月21日の開会式には来賓に配布された後、少なくとも8月29日に追加注文があり、更に9月16日に追加の可能性がある。

6 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』資料①、資料②、資料③の制作順序

『鳥瞰図』資料①、資料②、資料③と3点の資料について、鳥瞰図および背面の記載内容、制作の日程等について考察を加えてきた。また、冒頭で記したように資料①→資料②→資料③の順番で制作がなされたものと仮定を立てたが、以下ではその妥当性について考察を試みたい。

『鳥瞰図』を検討した結果、記載される内容は資料①②が先行し、これを改めることで資料③を制作したと見ることができた。また、裏面における検討でも、記載の差異を比較すると、資料①における不具合を資料②、更に問題点を資料③で改めていることが明らかとなった。

このため『鳥瞰図』は、当初の考えた資料①→資料②→資料③の順序で作成とする仮定は妥当なもの判断される。また、制作の日程は初版が8月21日に配布、8月29日に追加注文があり、更に9月16日に追加の可能性がある。

7 さいごに

以上の考察から、『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』については次のようにまとめることができよう。

- 1) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』は昭和6(1931)年、上越線全通記念博覧会に際して版を改める等して少なくとも3種類の作成が行われ、開会式などにおいて配布がなされた。
- 2) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』に描かれる博覧会建物は、比較的正確に建物の描写がなされている。資料間で鳥瞰図の内容は資料①と②が同一で、資料③に至りより精緻になったものが目立つ。
- 3) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』背面は資料間で記載に微細な差異が確認できる。
- 4) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』は昭和6(1931)年7月21日に校正、8月2日に注文があり、開会式の8月21日には来賓に配布され、少なくとも8月29日に追加注文があり、9月16日に追加の可能性がある。
- 5) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』は「会場案内図」などとも呼称された。
- 6) 『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』は資料①→資料②→資料③の順で作られたと考えて矛盾は生じない。

注 記

- 1 平山：昭和6(1931)年刊行の『長岡大観』について、長岡造形大学紀要8、120～128頁、平成23(2011)4
- 2 長岡市主催上越線全通記念博覧会：長岡大観、昭和6(1931)8
- 3 長岡市：長岡市主催上越線全通記念博覧会誌、昭和7(1932)7
- 4 長岡市：会誌451頁、前掲
- 5 長岡市：会誌139頁、前掲
- 6 長岡市：会誌145頁、前掲
- 7 「主催」は向かって右からの横書きとなる。
- 8 資料①のみ、これ以外にも8個の市章が文字と重ならないよう、画面に配される。
- 9 長岡市：会誌、上越線全通記念博覧会第一会場（長岡市）

配置図裏面、前掲

- 10 長岡市：会誌139頁、前掲
- 11 長岡市：会誌214頁、前掲
- 12 長岡市：会誌214頁、前掲
- 13 長岡市：会誌215頁、前掲
- 14 長岡市：会誌 上越線全通記念博覧会正門設計図、前掲
- 15 長岡市：会誌 上越線全通記念博覧会第一会場（長岡市）配置図、前掲、には正門前に“自営建築物”の記載がある。
- 16 長岡市：会誌142頁、前掲
- 17 長岡市：会誌216頁、前掲
- 18 長岡市：会誌140頁、前掲
- 19 長岡市：会誌141頁、前掲
- 20 長岡市：会誌334-335頁、前掲
- 21 長岡市：会誌142頁、前掲
- 22 長岡市：会誌141頁、前掲
- 23 長岡市：会誌213頁、前掲
- 24 長岡市：会誌334頁、前掲
- 25 長岡市：会誌142頁、前掲
- 26 長岡市：会誌146頁、前掲
- 27 長岡市：会誌336頁、前掲
- 28 長岡市：会誌149頁、前掲
- 29 長岡市：会誌145頁、前掲
- 30 長岡市：会誌345頁、前掲
- 31 長岡市：会誌345頁、前掲
- 32 長岡市：会誌145頁、前掲
- 33 長岡市：会誌 写真「階上喫茶室」、前掲
- 34 長岡市：会誌336頁、前掲
- 35 長岡市：会誌150頁、前掲
- 36 長岡市：会誌336頁、前掲
- 37 長岡市：会誌 写真「展望台、九皋橋と牧野名誉総裁題字」、前掲
- 38 長岡市：会誌337頁、前掲
- 39 長岡市：会誌345頁、前掲
- 40 長岡市：会誌144頁、前掲
- 41 長岡市：会誌143頁、前掲
- 42 長岡市：会誌140-141頁、前掲
- 43 長岡市：会誌139頁、前掲
- 44 長岡市：会誌349頁、前掲
- 45 長岡市：会誌351頁、前掲
- 46 長岡市：会誌216頁、前掲
- 47 長岡市：会誌349頁、前掲
- 48 長岡市：会誌139頁、前掲。なお、塔屋の名称の内、東側は報告書にも適当なものがなく、“東塔屋1”“東塔屋2”とした。
- 49 長岡市：会誌348頁、前掲
- 50 長岡市：会誌216頁、前掲
- 51 長岡市：会誌358頁、前掲
- 52 長岡市：会誌215頁、前掲
- 53 長岡市：会誌358頁、前掲
- 54 資料③では、その前面の植え込み中にある四阿風の建物を「静岡茶接待所」と考えた可能性がある。
- 55 長岡市：会誌358頁、前掲
- 56 長岡市：会誌216頁、前掲
- 57 長岡市：会誌213頁、前掲
- 58 長岡市：会誌358頁、前掲
- 59 長岡市：会誌140頁、前掲
- 60 長岡市：会誌216頁、前掲
- 61 長岡市：会誌216頁、前掲

- 62 長岡市：会誌 420 頁、前掲。なお、メリーゴーランドと富士山のぼりは 5 銭の料金を課したが、前者は 10 日余で運転不能になったという。
- 63 長岡市：会誌 354 頁、前掲
- 64 長岡市：会誌 144-145 頁、前掲
- 65 長岡市：会誌 216 頁、前掲
- 66 長岡市：会誌 写真「コドモノ国の賑ひ」、前掲
- 67 長岡市：会誌 217 頁、前掲
- 68 長岡市：会誌 355 頁及び写真「飲食店の一例」、前掲
- 69 長岡市：会誌 142 頁、前掲
- 70 長岡市：会誌 357 頁、写真「奈良館と鐘楼」、前掲
- 71 長岡市：会誌 146 頁、前掲
- 72 長岡市：会誌 216 頁、前掲
- 73 長岡市：会誌 217 頁、前掲
- 74 長岡市：会誌 358 頁、前掲
- 75 長岡市：会誌 214、358 頁、前掲
- 76 長岡市：会誌 365 頁、前掲
- 77 長岡市：会誌 144 頁、前掲
- 78 長岡市：会誌 144 頁、前掲
- 79 長岡市：会誌 367 頁、前掲
- 80 長岡市：会誌 216 頁、前掲
- 81 長岡市：会誌 357 頁、写真「報知新聞塔と名古屋館」、前掲
- 82 長岡市：会誌 367 頁、前掲
- 83 長岡市：写真「宝翰堂文具館」、前掲
- 84 長岡市：会誌 330 頁、前掲
- 85 資料②、③には鳥瞰図欄外に示される「新潟 青木印行」の印刷である。長岡市外における作業がこのような事態の原因の一つになったものとも考えられるが、推測の域を出るものではない。
- 86 長岡市：会誌、「上越線全通記念博覧会概要」、前掲
- 87 長岡市：会誌 12-13 頁、前掲
- 88 長岡市：会誌 45 頁、前掲
- 89 長岡市：会誌 174-177 頁、前掲
- 90 長岡市：会誌 203 頁、前掲
- 91 長岡市：会誌 205 頁、前掲
- 92 長岡市：会誌 205 頁、前掲
- 93 長岡市：会誌 日誌 15 頁、前掲
- 94 平山：昭和 6（1931）年刊行の『長岡大観』について、127 頁、前掲
- 95 長岡市：会誌 附録 17 頁、前掲
- 96 長岡市：会誌 425 頁、前掲
- 97 長岡市：会誌 附録 18 頁、前掲
- 98 長岡市：会誌 附録 19 頁、前掲
- 99 長岡市：会誌 日誌 18 頁、前掲
- 100 長岡市：会誌 日誌 18 頁、前掲
- 101 長岡市：会誌 日誌 20 頁、前掲
- 102 長岡市：会誌 日誌 21 頁、前掲



上越線全通記念博覧會鳥瞰圖

會期 昭和六年 自八月廿一日 至九月廿一日

主催 長岡市

會期 昭和六年

八月二十日 至九月二十日

上越線全通記念博覽會圖



主催 長岡市



主 題 上越線全通記念博覽會開催の趣意

上越の地は交通の便に苦み、運輸其便を缺く事久しく、爲に北陸の地は僅に打曲せる信越、鐵道の兩線により中央帝都との連絡を保つに過ぎず、然るに今や上越線開鑿の工大いに進み、東洋第一なる清水隧道の貫通に定まり、昭和六年九月念日は全通の慶福に浴せん。運輸の利便、資糧の調度、文化の普及、豊實に沿線關係者の歡喜のみにとどまらず、其の福利の及ぶ國内外的には表裏日本を連絡する最長路として運輸系統の一大變革を來し、國際的には太平洋と日本海とを聯繫する世界周行の大路を拓かれ、東京、長岡、新潟を経て浦津に結ぶ最短幹線ならんとす。近にこれ國際交通の劃時代的意義を蒙るものと謂ふべし。我長岡市は上越線の分岐點にして水陸運輸の要衝に當り沿線第一の代表都市なり。廣表八百餘方里、海岸線百餘里人口二百萬を擁する新潟縣の中央に位する地の利と天の恵とを、市民の國運進取の氣象と相俟つて、石油に鐵工に製紙に染織に、自然なる生産都市として頌を北陸に唱へ商業金融の業從つて發達し、市勢に放散を極め、越後文化の源流を以て自負自任す。即ちここに上越線全通を記念祝賀すべく一大博覽會を開催して、弘く實業の精と藝術の粹とを列ね、世界不偏の現況を打開し、以て神國運の隆昌に裨益せん事を期す若し其れ開闢地並に附近の境域に至つては史蹟に蒸泉に、來會者の旅情を慰し、詩思を養ふに足るもの少からざるを期す。

上越線全通記念博覽會長

- 長岡市長 小林清三郎
- ### 役員
- | | |
|------|--------------|
| 名譽總裁 | 子爵 牧野忠篤 |
| 總裁 | 伯爵 福嶋正三 |
| 副總裁 | 新選組内務部長 橋本圭三 |
| 名譽顧問 | 實業部長 鷺尾德三 |
| 顧問 | 長岡市會議員 木村清三 |
| 會長 | 長岡市會議長 田村寅吉 |
| 副會長 | 長岡市助役 關威雄 |

困難 況

品名	數量	價目
第一會場	九月二十一日	八萬二千元
第二會場	九月二十一日	九萬二千元
第三會場	九月二十一日	一萬二千元
第四會場	九月二十一日	一萬二千元
第五會場	九月二十一日	一萬二千元
第六會場	九月二十一日	一萬二千元
第七會場	九月二十一日	一萬二千元
第八會場	九月二十一日	一萬二千元
第九會場	九月二十一日	一萬二千元
第十會場	九月二十一日	一萬二千元

品名	數量	價目
第一會場	九月二十一日	八萬二千元
第二會場	九月二十一日	九萬二千元
第三會場	九月二十一日	一萬二千元
第四會場	九月二十一日	一萬二千元
第五會場	九月二十一日	一萬二千元
第六會場	九月二十一日	一萬二千元
第七會場	九月二十一日	一萬二千元
第八會場	九月二十一日	一萬二千元
第九會場	九月二十一日	一萬二千元
第十會場	九月二十一日	一萬二千元

●本會開休

大人	二角
小入	一角
兒童	五分
學生	五分
老人	五分
盲人	五分
貧民	五分
遺孀	五分
孤兒	五分
病者	五分
傷者	五分
死者	五分
無名	五分
其他	五分

●本會開休

品名	數量	價目
第一會場	九月二十一日	八萬二千元
第二會場	九月二十一日	九萬二千元
第三會場	九月二十一日	一萬二千元
第四會場	九月二十一日	一萬二千元
第五會場	九月二十一日	一萬二千元
第六會場	九月二十一日	一萬二千元
第七會場	九月二十一日	一萬二千元
第八會場	九月二十一日	一萬二千元
第九會場	九月二十一日	一萬二千元
第十會場	九月二十一日	一萬二千元

●本會の誇り

●主なる観物(動くもの)

- ▲野外スチーフ 地味彫刻や青銅が毎日晝夜演説される
- ▲観音宮 觀音菩薩の尊像を有する
- ▲浮城 浮城の遺跡を再現する
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す

●本會の誇り

●主なる観物(動くもの)

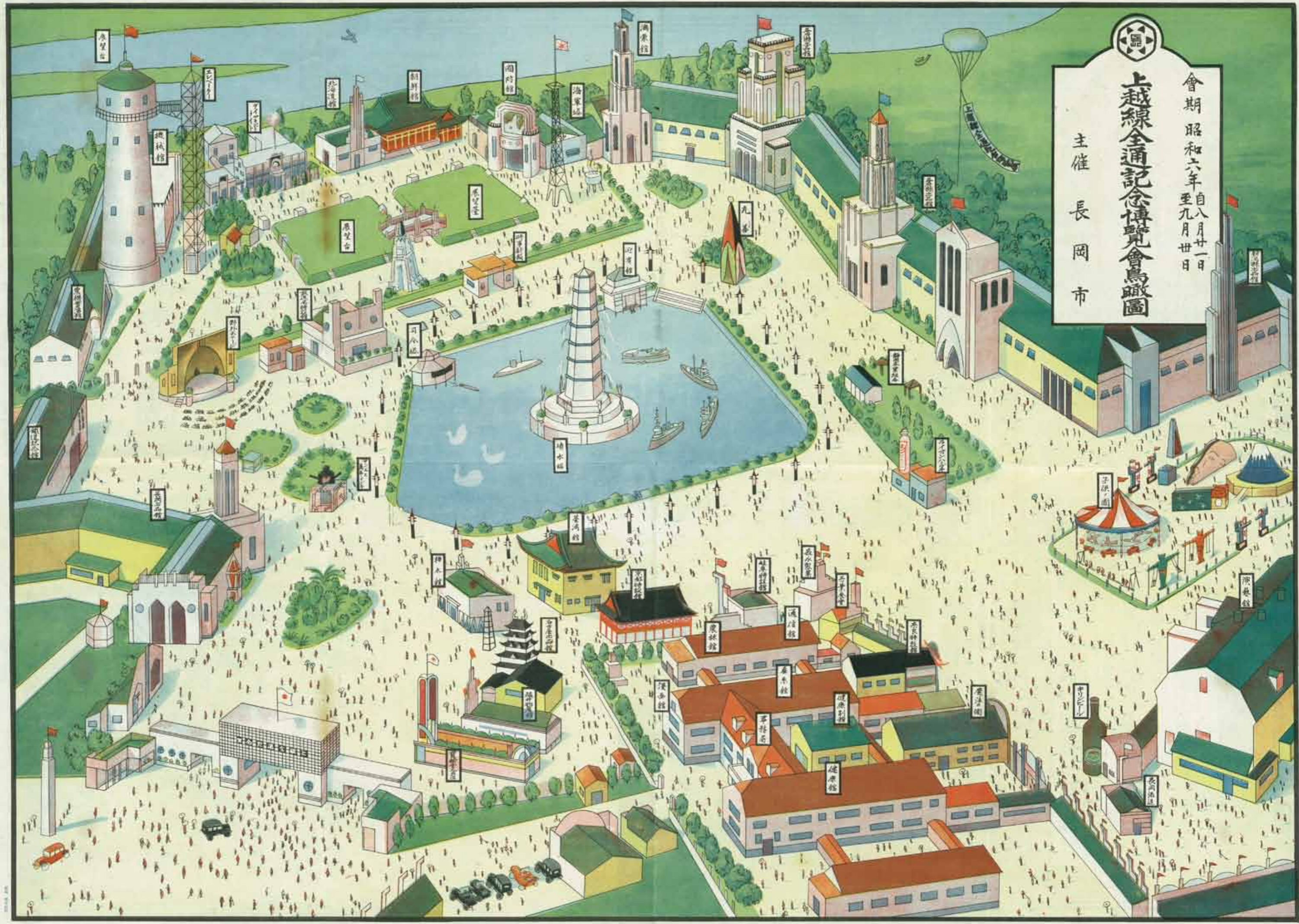
- ▲野外スチーフ 地味彫刻や青銅が毎日晝夜演説される
- ▲観音宮 觀音菩薩の尊像を有する
- ▲浮城 浮城の遺跡を再現する
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す
- ▲大噴水 噴水の中心に三十三の噴水が噴き出す



上越線全通記念博覧會鳥瞰圖

會期 昭和六年 自八月廿一日 至九月廿日

主催 長岡市



會期 昭和六年 自八月二十日 至九月二十日

上越線全通記念博覽會

主催 長岡市

上越線全通記念博覽會開催の趣意

上越の境嶽嶺険にして行路其の峻に苦み、運輸其便を缺く事久しく、爲に北陸の地は僅に迂曲せる信越、雙越の兩線により中央帝都との連絡を保つに過ぎず、然るに今や上越線開通の工大いに進み、東洋第一たる清水隧道の貫通に完きを得て昭和六年九月念日は全通の慶に當せん。運輸の利便、貿易の開發、文化の普及、豊實に沿線關係者の歡喜のみにとどまらんや。其の福利の及ぶ處國內的には表裏日本を連結する最捷路として運輸系統の一大變革を來し、國際的には太平洋と日本海とを聯繫する世界周行の大路新に拓かれ、東京、長岡、新潟を経て浦津に結ぶ最捷幹線たらんとす。正にこれ國際交通の劃時代的意義を齎すものと謂ふべし。我長岡市は上越線の分岐點にして水陸運輸の要衝に當り沿線第一の代表都市なり。廣袤八百餘方里、海岸線百餘里人口二百萬を擁する新潟縣の中央に位置する地の利と天の恵とは、市民の運進取の氣象と相俟つて、石油に鐵工に製紙に染織に、蔚然たる生産都市として朝を北陸に唱へ商業金融の業従つて發達し、市勢夙に殷賑を極め茲に越後文化の源委を以て自負自任す。即ちここに上越線全通を記念祝賀すべく一大博覽會を開催して弘く實業の精を業め生産の輝を列ね以て上越線利用の魁をなすと共に富麗の開發と商機の開拓とによりて産業の振興を促進し、財界不振の現況を打開し、以て聊か國運の隆昌に裨補せん事を期す若し其れ開催地並に附近の地域に至つては史蹟に景勝に温泉に、來會者の旅情を慰し、詩思を養ふに足るもの少からざるを信す。

上越線全通記念博覽會長

長岡市長 木村清三郎

役員

- 名譽總裁 子爵 牧野忠篤
- 總裁 新海縣知事 黒崎野
- 副總裁 新潟縣内務部長 福嶋
- 名譽顧問 貴族議員 橋本圭三
- 顧問 長岡市工會議所會頭 鷺尾徳之
- 會長 長岡市長 木村清三
- 副會長 長岡市會議長 田村寅三
- 總務長 長岡市助役 關威

概況

品名	出展館	出展品	出展館
...

主催 五千八百七十坪

出品本館	一八三二坪	水鏡館(第二會場)	三
長岡市出品館	一〇〇〇坪	無料休館所	...
...

参加區域 朝鮮、臺灣、樺太、北海道、關東、南洋羣島、三府、四十四縣、全國商事相談所
 教育博覽會 坂ノ上小學校、九月一日—十五日
 演藝館、野外劇場、音樂堂、コドモ世界、魔法ノ城、人間創造等々
 長岡名産 大塚火三尺玉(直径三〇)以下ヲ毎日數百發ヲ、晝夜ニ其リ打馬ヲ
 ハ日本一ノ信濃川ニ臨ミ越後平野ノ中心點ニアリ中央ニ二坪ヲ濶ク新設シ中央ニ大噴水ヲ設ケ
 毎日五萬石ノ水ヲ濶クシテ放流ス
 上越線全通記念博覽會建築士金澤野村實一
 上越線全通記念博覽會建築士金澤野村實一
 上越線全通記念博覽會建築士金澤野村實一

入場料(個人)

年齢	入場料
大人	五〇人以上 一〇〇人迄 二〇〇人迄 三〇〇人以上
小人	五〇人以上 一〇〇人迄 三〇〇人以上

本會團體

- 一、青道團 五〇人以上 一〇〇人迄 二〇〇人迄 三〇〇人以上
- 二、新引 五〇人以上 一〇〇人迄 二〇〇人迄 三〇〇人以上
- 三、新引 五〇人以上 一〇〇人迄 二〇〇人迄 三〇〇人以上
- 四、新引 五〇人以上 一〇〇人迄 二〇〇人迄 三〇〇人以上

八月二十一日午後一時—九月三十日迄 午前八時—午後五時 午後六時—午後十時迄
 夜間開場ハ八月二十一日—九月九日ヲ限リ見込シテ出品館ハ開場セザルモノトス
 観覽券 要スル時間 一トマツリ 三時間 ムツリ 六時間

主なる観物(動くもの)

- ▲野外ステージ 砲土壘砲や實銃が毎日日夜演習される ▲鐵道實演 野岩や種々の機械を動かして大工事なから演習する ▲放送局特設館 ラヂオの放電、ネオンコントロイル、赤外線等の最新設備で目を驚かす ▲噴水 直径二十坪の大噴水は毎日五萬石の清水を十尺の高さに噴出して大地へ灑ぎ降る涼風の中心である ▲納涼池 二十坪の池には三千尾の二十斤名物の鰻がおよぎ、毎日海軍で成常の遊樂場、軍艦製作の賣場をやる ▲大噴水 池の中央に三三三の噴水は五十分の噴き上げ、各階からゲルリの皇子の御侍でクルクルと回る球から各組を遊ばせる、幾千の電光に映する美観は想像に絶する ▲エレベーター 一歩を踏べば百三十尺の高さに昇り降りして地中野を大觀し得る(料金十五錢) ▲展覽館 階々に快き芝生には信濃川の波風が真直に會場内の全部を照らし得る ▲ダイヤモンド 直径七尺無数の細面が放射して電光と相映し目も眩むばかりである ▲野球 野球やサッカー等々を毎日演習する事三つ四つ又大博覽會の一景である ▲學天閣 富士山のぼり、三日月、アランコ等々を持つ観望台で毎日演習する事三つ四つ又大博覽會の一景である ▲演藝館 華かな長岡舞臺の演習を毎朝科擧のトリック人間製造一度二度では見足らぬ興味の中心點 ▲魔法の洞 魔法をかければ椅子がなく、浦島太郎は見る／＼内に白雲に化し花の美化はグラ／＼と美しいもの見たい火供小供は入れらねばならぬ ▲活動寫眞 活寫眞の個に十六ミリが面白い場面が替りに替り、外敵夕別に映される。

本會の誇り

●四千四百坪の建築物が全部新材で地元の手に新築された事は我長岡人の意氣を示したものでいくら自慢しても自慢しきれぬ誇りである。博覽會の一番大きな金は建築だから市民の金は市民へといふ事だが、これもよく呼ばれ、いろいろの承継や運動が行はれて結局は我長岡人となるが既に成る材料と熟練した技術をもつ建築者と軍需の競争の出来が全く結局空騒ぎの果が警備者の古物を使ふといふ切羽である。本會でも市民の氣概に信賴してゐたが多少の危懼はあつて兎に角第一回は新材に限ると云ふことで公入札をやつて見ようといふ結果は東京や方々の競争に打ち勝ち見事成功の請負師が引受けた事は正に従来の型を破つたもので我等は是を長岡人士の氣概に歸するものである。

●建築のプランニングに一つの理想を持つて進んだ事は之も一寸例のない誇りである。二萬五千坪を投じた新潟縣下の最も優秀な建築家を潰して新設した二萬三千坪の會場の真中へ二坪の池を掘り其の周圍に一切の建築物を撤去して設置したので觀覽者ははたしめ小場内何の地味からも壯大な全景が一目に眺められる事は博覽會といへばすぐ權威といふ事を體驗させられる事に習慣づけた人々には大きな驚異である。

●意味萬分といふ事は八月二十一日から開かれる此の博覽會の爲に作られた文字であらう。會場は日本一の大河川を濶く岸に沖間最低七千圓の水量を有する清瀧川に臨み朝は名高い米山嵐をまともに受け夕は霞雲二百里の清水を放流し内外から直接間接に幾千燦光の照明を施し七尺の無数の細面が放射するダイヤモンドと相俟つて我の美観は想像の外に出よう何しろ日本一の信濃川を濶くして二萬圓を投じた長岡市上水場を場内に取入れてあるのだから、水と涼味は無敵である。

●博覽會の収入といへば補助金と使用料と入場料にきまつてゐるが我長岡市比が市の爲には遠んで巨費を投ずるの美風と市當局のかゝる事業は誰れも持つべきでないといふ方針から三十三萬の總經費の四分一八萬五千圓を市民の寄附に持つのである。協賛會の方と合すれば十四萬の巨額を此の不況時代に惜しめなく投げ出す巨額は一才割と眞似手がないであらう。

●博覽會といへば大なり小なり何かの契機がなくてはならぬが其の多くが第二次的であつて博覽會をやらうとしてから契機を求め名をつけるのが多いからどうも博覽會其の物とピツタリせぬのが多く殊に近年は歴史的に始められる博覽會もある様である。

●本會は上越線全通といふものが明に全日本的に産業上の大革新を來すのであるし大正七年此の大工事が始まつた時から成功期には博覽會をといふものでより計画され大正十五年には既に豫算成つたのであるからそれから文でも既に六年、其の意氣込が尋常一種でない事は察し得よう従つて各層層も豫想以上の熱意を以て参加せられ地方博覽には珍しく且下種民全部と三府四十縣の参加が決定し未決定のものも唯三縣文である事は天下に呼號して誇つていい事である。従来の各博覽會の参加は左の通りである。

年度	参加者数	参加費
昭和二年
昭和三年
昭和四年
昭和五年
昭和六年

●博覽會があれは協賛會が出来る、と云ふが協賛の主旨はあつてもかく仕事はゆづりあひなどありがちなものだが、こゝはどつちがどつちかからの位をツツリしてゐる事も誇りの一つである。



巨越線全通記念博覧会鳥瞰図
會期 昭和六年 自八月廿日 至九月廿日
主催 長岡市

